『洒落本』における連接母音の長母音化

－aiとe:の使用状況を中心として－

福島　直恭

1. 本研究の目的

少なくとも中古以前の日本語は、その基本的な性格として、意味単位中に母音の連続を積極的には認めないタイプの言語といえる。そのため、何らかの事情で母音連続が生じた場合、それを解消する方向性を持つと解釈できるような変化が、中世以降も含めて、日本語の歴史上にいくつもみられる。小稿で取り扱う、連接母音aiなどの長母音e:への変化も、その一例ということができるであろう。小稿の筆者は、このai→e:をはじめとする連接母音の長母音化という、過去の日本語に起こった言語変化の全体像を把握することを通して、言語変化の方向性や、変化のメカニズムを明らかにしようという一連の試みに取り組んでいる。

その中において、小稿では、主として18世紀中、後期にかけての江戸語における、aiの長母音e:への変化の実態を把握することをめざすつもりである。この点に関しては松村（1957）をはじめとする先行研究が多数存在するし、小稿の筆者もすでに福島（1999a）、福島（1999b）等によって、滑稽本を資料として18世紀終盤の江戸語の連接母音の長母音化について述べている。それに対して小稿は、それ以前の江戸語では、はたして長母音化はどの程度進んでいたのかということを、同じ分析方法を用いて明らかにし、両時代間の比較を可能にするための基礎とすることを目的としたものである。

2. 使用する言語資料と調査項目

小稿で使用する資料は、いわゆる『洒落本』のうち、18世紀中、後期に成立したもので、内容が会話中心で口頭言語の資料として比較的妥当と思われるものである。具体的には次の8本[*1]の会話部分（謡曲の部分は除く）を対象として調査を行った。

・「郭中奇譚」（1769年）
・「遊子方言」（1770年）
・「辰巳之園」（1770年）

・「南江駅話」（1770年）
・「侠者方言」（1771年）
・「南閨雑話」（1773年）
・「寸南破良意」（1775年）
・「甲駅新話」（1775年）

今回調査したのは、これらの『洒落本』の会話部分に現れる連接母音aiを含む言語形式において、連接母音のままの形で現れるものと、長母音化したe:の形で現れたものの全用例である。ただし、応答詞の「ハイ」「アイ」などは、形の上でこれらに対応する「へー」「エー」との関係が、例えば「あぶない」と「あぶねえ」のような標準形式と非標準形式との対立と同様の関係とは言い難いと思われるので除外して考えることにする。また、例えば「食いねえ」などの「～ねえ」は、おそらく「～ない」→「～ねえ」という変化が考えられるが、これも「～ない」の形の方がほとんど見られない状態だったので、考察の対象から除外した。

当該の言語形式が仮名表記されている場合と、漢字書きされていてそれに振り仮名がついている場合とは区別せずに扱った。

3. 変異の社会的分布と言語変化の関係

福島（1999a）でも述られているように、言語変化の過程は、言語的変異の使用の規則的な偏りという形で、一共時態内にその痕跡をとどめている場合がある。次の＜図1＞は、言語変化が進行中のある特定の言語社会における、変異形が現れる言語的環境と話者集団を基準とした、言語的変異の分布状況の型のひとつのモデルである。［α］［β］はそれぞれある言語変項の変異形（variant）を指し、［α］はより古くからある形、［β］はそれに対応する新しい形を意味しているとする。

＜図1＞

	話者集団1	話者集団2	話者集団3
言語的環境A	［α］	［α］	［α］［β］
言語的環境B	［α］	［α］［β］	［β］
言語的環境C	［α］［β］	［β］	［β］

＜図1＞の場合、集団3に所属する話者は、全ての言語的環境において新しい形である［β］を使用する可能性があり、この言語社会においては最も［β］の使用頻度が高いということになる。逆に集団1に所属する話者は、言語的環境Cの場合のみ［β］を使用する可能性があるだけで、他の環境ではすべて古い形の［α］しか現れない。彼ら

は、この言語社会においては最も［β］の使用頻度が低く、最も［α］の使用頻度が高い話者だということである。

同様のモデルは福島（1999a）でも示されており、そこでは『浮世風呂』にみられる連接母音 ai と長母音 e：との使用実態が、このようなモデルにほぼあてはまることが確認されている。つまり、［α］は連接母音 ai を含む言語形式（以下「ai 形式」と略称）に該当し、［β］はそれが長母音化した e：を含む言語形式（以下「e：形式」と略称）に該当するということであり、また言語的環境としては、当該の言語形式がどのような品詞であるかということと、和語か漢語かということとが関与的であるとしている。実際には『浮世風呂』に登場する話者達は、ai 形式と e：形式の使用に関しては５つの集団に分類され、言語的環境の方は４つに分類されることになる。福島（1999a）の『浮世風呂』の調査結果を＜図１＞に合わせて図示すると次の＜図２＞のようになろう。

＜図２＞

	集団１	集団２	集団３	集団４	集団５
言語的環境 A	ai	ai	ai	ai・e：	e：
言語的環境 B	ai	ai	ai・e：	e：	e：
言語的環境 C	ai	ai・e：	e：	e：	e：
言語的環境 D	ai・e：	e：	e：	e：	e：

なお、表中の言語的環境とは、具体的には以下のような分類をさす[*2]。

言語的環境 A …動詞→「書い～」：「けー～」、「違ひ～」「ちげー～」など

言語的環境 B …和語名詞→「ひたい」：「ひてー」、「あいだ」：「えーだ」など

…形容詞→「えらい」：「えれー」、「高い」：「たけー」など

言語的環境 C …漢語名詞→「全体」：「ぜんてー」、「題目」：「でーもく」など

…「無い」という形容詞→「ない」：「ねー」

…「ない」以外の助動詞→「まい」：めー」、「たい」：「てー」など

言語的環境 D …「～ナイ」という形の形容詞→「あぶない」：「あぶねー」など

…「ない」という助動詞→「ない」：「ねー」

言語的環境 D というのは、この言語社会においては最も連接母音 ai が長母音化しやすい環境であり、それが C → B → A の順に長母音化しにくくなっていくということが＜図２＞からわかる。また、『浮世風呂』の登場人物の中では、言語的環境 A に e：形式が現れる話者、つまり「書いて」を「けーて」といったり「違います」を「ちげーます」といったりするのはごく一部の話者（集団4や5に属する話者）に限られるのに対して、言語的環境 D ではほとんどすべての話者に、例えば「あぶねー」とか「行かねー」という

e：形式が現れるということになる。

福島（1999a）では、このような調査結果から、連接母音の長母音化はまず言語的環境Dに該当するような諸語からはじまり[*3]、次にC→B→Aという方向で進んでいったものと結論づけている。これは特定の共時態における<図2>のような変異の分布が、言語変化の方向性という通時的な問題を考察する手がかりになるということである。

ただし、ここで注意しなければならないことは、ある言語社会に<図1>のような変異の使用分布がみられるからといって、それが必ずしも進行中の言語変化の一断面を示したものとは限らないということである。つまり、<図1>のような言語社会の数年前とか数十年前は、必ず次の<図3>のような状態であったとは限らないし、

<図3>

	話者集団1	話者集団2	話者集団3
言語的環境A	［α］	［α］	［α］
言語的環境B	［α］	［α］	［α］［β］
言語的環境C	［α］	［α］［β］	［β］

また同様に、<図1>のような言語社会の数年後とか数十年後は、必ず次の<図4>のような状態になる保証もないのである。

<図4>

	話者集団1	話者集団2	話者集団3
言語的環境A	［α］	［α］［β］	［β］
言語的環境B	［α］［β］	［β］	［β］
言語的環境C	［β］	［β］	［β］

なぜならば、時間と共に変化していくのは常に言語の方ばかりとは限らず、「変異の分布の仕方はそのままで、逆に話者自身が集団を移っていく場合」も考えられるからである。集団を移っていくといっても、例えば社会階級のように、下流から中流、あるいは中流から下流のように双方向的な変化の可能性を持つような属性もあるし、世代のようにすべての人間が必然的に一方向に変化していくような属性も考えられる。どちらにしても、「変異の分布の仕方はそのままで話者自身が集団を移っていく場合」というのは、自分が所属する集団が変わった際に、前の集団の言語使用基準を捨てて、新たな所属先の使用基準にあわせるということである。例えば、ある個人が年齢と共に待遇表現の使い方が変化していくというような、どの時代にも、どの社会にもみられそうな個人の言語使用の変化はこのタイプに属するもので、こういう場合は、言語体系を基準としてみ

れば、各話者集団の使用基準（変異の分布）自体は変化していないということになる。つまり、例えば<図１>のような変異の分布は、その前の時代からそのまま引き継がれたものであり、次の時代へもそのまま引き継がれていくものであって、進行中の変化の断面を示したものではないということも十分考えられるわけである。

そう考えると、福島（1999a）で明らかにされた『浮世風呂』の話者達の言語使用の実態（<図２>のような状態）も、それを進行中の変化の断面として「連接母音の長母音化」という言語変化の分析の手がかりとするためには、その状態がひとつ前の時代には別の状態を示していて、そこからの連続的な変化として位置づけることが可能であるかどうかを吟味してみる必要があることになる。小稿の第一の目的は、その点を明らかにしようとすることである。そのために、次の順に考察を進めていくことにする。

①.『浮世風呂』以前の江戸町人の長母音化の状態（つまり『洒落本』での長母音化の状態）はどのようなものであったかを把握する。

②. その状態は『浮世風呂』の状態の前の段階として、一連の変化の過程の一断面と位置づけることが可能かどうかを検討する。

4.『洒落本』におけるai形式とe:形式の分布

前節の①、②を明らかにするために、2節で列挙した『洒落本』を対象として、ai形式およびe:形式がどのような話者のどのような言語形式の中に、どちらの形で現れるかということを調査した。『洒落本』の長母音化に関しては、すでに小松（1985）などで考察されているが、小稿は前節で述べたような目的のもとに、両形式の出現しやすさに関わる言語的環境という基準をもとに、使用者ごとの使用状況を把握し、後続する時期の状況と整合性のある説明を試みようとするものであるという点で、先行研究とは異なるものである。

次の<表①>は、ai形式およびe:形式がどの資料にのべ何回現れたかをまとめたものである。

<表①>　ai形式、e:形式の出現数

	ai形式	e:形式
『郭中奇譚』	６０	０
『遊子方言』	１５１	２
『辰巳之園』	５２	３１
『南江駅話』	６６	１
『侠者方言』	１２	７９
『南閨雑話』	１２７	７
『寸南破良意』	７８	１０４
『甲駅新話』	３５	１０５
合　計	５８０	３２９

<表①>によると、今回調査した『洒落本』の中においては、連接母音 ai の長母音化率（e：形式の使用数／［ai 形式の使用数＋e：形式の使用数］×100）は約36％となる。これは、『浮世風呂』での ai の長母音化率の約45％と比較すると、長母音化率＝e：形式の使用率が少ないということがわかるであろう。

	ai 形式	e：形式	長母音化率
『浮世風呂』	1253	1001	約45％
『洒落本』	580	329	約36％

ただし合計数としてはe：形式が少ないといっても、資料別にみてみると、中にはe：形式の使用数の方が ai 形式の使用数を上回っているものもあり、ひとくちに『洒落本』といっても、両形式の使用数で見る限り均一的な資料として扱うことの難しさを示す数字ともいえる。また、このような言語的変異形の使用について考察する場合には、使用者や使用場面の違いや、どのような言語的環境に連接母音、長母音のどちらが多く現れるかという、より詳しい分析が必要であることは福島（1999a）によってすでに明らかにされている。そこで、どのような言語的環境にどちらの形がどれくらい現れたかを、８本の資料別にまとめたものが次の<表②>である。なお、表中の言語環境の分類（縦の欄）は、福島（1999a）の『浮世風呂』の調査の結果、比較的広い範囲の話者にe：形式の使用がみられたようなものは下に、一部の話者だけにe：形式の使用がみられたものは上にくるようにほぼ並べてある。この並べ方は、歴史的な観点からいえば、長母音化

<表②>　ai形式、e：形式の言語環境別出現状況

	郭中奇譚		遊子方言		辰巳之園		南江駅話	
	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式
動詞	5	0	10	0	8	0	10	0
和語名詞	6	0	17	0	17	4	14	0
形容詞（～ナイ以外）	9	0	13	0	2	0	5	0
漢語名詞	10	0	26	0	15	1	13	0
助動詞（「ない」以外	9	0	33	0	8	0	7	0
形容詞「無い」	8	0	8	1	1	6	7	0
形容詞（～ナイ）	3	0	2	0	1	1	1	0
打消助動詞「ない」	10	0	42	1	0	19	9	1
	侠者方言		南閻雑話		寸南破良意		甲駅新話	
	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式	ai 形式	e:形式
動詞	1	0	10	0	7	1	11	0
和語名詞	10	11	19	0	32	1	12	18
形容詞（～ナイ以外）	0	4	1	0	13	3	5	11
漢語名詞	1	16	17	0	15	4	6	14
助動詞（「ない」以外	0	8	25	0	5	1	1	24
形容詞「無い」	0	13	9	0	3	11	0	5
形容詞（～ナイ）	0	1	2	1	2	2	0	2
打消助動詞「ない」	0	26	44	6＊	1	81	0	31

が比較的早くから起こった言語形式はより下に配列されているということになる[*4]。もし、『洒落本』にみられるaiの長母音化は、まさに当時進行中の言語変化で、『浮世風呂』の長母音化の前の段階を表しているのだとしたら、この縦の欄の配列をそのまま『洒落本』にも適用することによって、何らかの傾向が浮かび上がってくることが期待される。

<表②>のうち、「南閨雑話」のe:形式の助動詞「ない」の仮名表記には2種類みられた。[ねへ]というのが4例と[ねい]というのが2例である。この場合は両表記の違いを音の違いとは考えず、合計6例をe:形式の用例とした[*5]。また、「寸南破良意」には、例えば打消の助動詞でいえば「ない（ひ)」「ねへ」の他に「なへ」というCa＋e型の表記が数多く（<表②>に載せた言語形式では計78例）みられた。これらは標準形式（ai形式）のつもりなのか、非標準形式（e:形式）のつもりなのか、あるいはそのどちらでもなく例えば両者の中間的フォーマリティーに該当する形式が存在したのか一概には判定しがたい上、用例数が多いので、扱い方によってこの資料の性格づけに大きな影響を与えてしまうものであった。よってここでは、このCa＋e型表記された言語形式はどちらにも所属させずに用例数から除いてある。同様の表記は「侠者方言」にもみられ[*6]、同じような処理をしたが、こちらの方は比較的少数（6例）である。<表①>の数値もそれらを除いたものとなっている。ただしこのような処理は、特に「寸南破良意」の場合、かなり大量のデータを無視したということになるので問題が残ることは認めなければならない。

<表②>によると、ai形式とe:形式の分布という観点からは、これら8種の『洒落本』を以下の3つのグループに分けることができそうである。

A①グループ…基本的にai形式のみ→e:形式が現れるとしたら打消の助動詞「ない」か、形容詞で「～ナイ」という形態を持つもの（「無い」も含む）に限定される。

→「郭中奇譚」、「遊子方言」、「南江駅話」、「南閨雑話」

A②グループ…A①グループに比べてe:形式の出現数が増え、助動詞「ない」や形容詞「～ナイ」は長母音化したne:の方が中心になる。ただしやはり長母音化はA①と同様の範囲にほぼ限られる。

→「辰巳之園」、「寸南破良意」

Bグループ　…e:形式が「動詞」以外の広い範囲に現れる

→「侠者方言」、「甲駅新話」

A②グループの「辰巳之園」には、和語名詞のaiに長母音化がみられる[*7]が、4例すべて「参る」が「めへる」というe:形式になったもののみで、この一語に限定されてい

る。エイチソン（1994）は「変化の過程においては、使用頻度の高い語は、他の語に先んじて変化するとか、特殊な行動をとりやすい」という趣旨のことを述べているが、まさにこの「参る」はその例であろう。この語を特殊な例外として除いてみれば、他は形容詞の「無い」、打消の助動詞の「ない」など、『浮世風呂』でも非常に広い範囲の話者に長母音化がみられた形式ばかりにｅː形式の使用が集中していることがわかる。さらに「寸南破良意」の分布からも同様の傾向を見て取ることができよう[*8]。結局Ａ①グループとＡ②グループは、一部の環境にしかｅː形式が現れないという点で基本的に同じ性格を持つ資料ということができそうである。

これに対して、Ｂグループの「侠者方言」と「甲駅新話」はかなり性格を異にするものといえる。特に「侠者方言」は動詞や和語名詞以外はほとんどｅː形式ばかりが現れるという点で、他の資料とは一線を画している。ai形式とｅː形式の使用に関するＡグループとＢグループのこのような隔たりの背景を明らかにするためには、<表②>のような、話者の違いを無視した数値のみでは限界があり、どうしても話者別の使用状況を明らかにする必要があると思われる。

次の<表③>は、8種の『洒落本』に登場した話者のうち、ai形式やｅː形式の使用が比較的多かった話者（合計10例以上の使用がみられた話者）についてまとめたものである。また、個人では使用が10例に達しないが、同じ文献に登場し、社会階層が同じと考えられるような話者達は、彼らの合計使用数を表に載せてある。具体的には、「辰巳之園」の船頭4人、「南閨雑話」の「星」と「琴」以外の女郎2人、「寸南破良意」の「おせつ」と「お長」以外の女郎8人である。なお、表中横の欄の言語環境のうち、「助動詞ナイ」とは、打消の助動詞「ない」以外の助動詞（「まい」「たい」など）を表し、「形容－ナイ」とは、「危ない」「汚い」など「～ナイ」という形態を持つ形容詞以外の形容詞（「痛い」「弱い」など）のことである。

ai形式とｅː形式の使い分けをどこまで重視して、登場人物の発話中にそれをどの程度表現しているかという点は、『洒落本』の中でも文献によって異なっている可能性が大きいであろう[*9]。よって小稿の筆者も、<表③>のように、異なる文献に登場する話者達を一列に並べて、数値だけで比較することに問題があるということは理解しており、この表を、例えば『浮世風呂』に登場する多くの話者達を同様の基準で一覧表にしたものと、同じ価値のある資料として扱うつもりはない。しかし、「郭中奇譚」、「遊子方言」、「辰巳之園」「南江駅話」、「南閨雑話」の話者達は、文献の違いをこえて、だれをみてもai形式の使用が優勢で、ｅː形式を使うとしたら打消の助動詞の「ない」か、あるいは「危ない」など「～ナイ」という形態を持つ形容詞（ここでは「無い」もそれに含める）にほぼ限られるということは確であろう。これらの文献には女郎達や船頭達も多く登場

しており、彼らを含めた話者達の社会階層が、『浮世風呂』に登場する話者達よりはるかに高いということはできないであろうから、両者の長母音化に関する違いは、それぞれの時代に変化（ai → e:）がどこまで進んでいたかという時間的な要素の影響が大きいと考えるべきであろう。例えば「辰巳之園」の「如雷」や「船頭達（4人）」、「南閨雑話」の「星」など4人の女郎達、「寸南破良意」の女郎「おせつ」や「茶舟のり」などは、今回の調査ではそのような環境にしかe:形式が現れない話者達の一部だが、仮に『浮世風呂』で彼らと同等の階層の話者をみれば、より多くの言語的環境でe:形式を使用することが確認できるであろう。先にも述べたように、これらの言語環境における長母音化は、『浮世風呂』においても、最も幅広い階層の話者達に、頻繁にみられたものであり、おそらく歴史的には一番早く長母音化が起こった環境といえそうである。もしそうなら、時間を遡ればそれらの環境だけに長母音化が及んでいた時期というのも想定できそうで

＜表③＞　ai形式話者別とe:形式の話者別使用状況

	助動詞ナイ		形容ーナイ		無　い		助動詞ナイ		漢語名詞		形容ーナイ		和語名詞		動　詞	
	ai	e:	ai	e:	ai	e:	ai	e:	ai	e:	ai	e:	ai	e:	ai	e:
客（郭中）	2		2		4		5		5		4		4		2	
通り者（遊子）	26	1			8	1	22		12	2	6		7		2	
息子（遊子）	2						1		1				5		1	
客人平（遊子）	5		1				4		4		3		1		3	
客（遊子）	6		1						1		2					
如雷（辰巳）		3				1	5		7		7		5		2	
船頭合計（辰巳）		4				2			1				3		1	
酔無（南江）	2				4		2		4		1		2		6	
袖浦（南江）	2	1	1				1		3		2		2		1	
十（俠者）		14		1						6			2	2		
久米（俠者）		5						3		2		2	2	1	1	
親分（俠者）		9				7		3	1	3		1	6	6		
吉（俠者）		6				5		1		3		1		1		
女郎・星（南閨）	7	4	2	1	4		3		2				4		3	
女郎・琴（南閨）	6	1					4		1				2		3	
他女郎合計（南閨）	5	1			1		1		3				2		2	
忠治（南閨）	15				2		8		4				4		1	
長　（南閨）	3						5		4		1		2		1	
女郎・おせつ（寸）		5		1		3			2				1			
女郎・お長（寸）		7							1	1	1		5		1	1
他女郎合計（寸）		20		1		1	1		3	1	2		8			
大工（寸）		6				4			1	1		1	2	1	1	
息子・徳（寸）	2	1	1		1		1		2		1		3		1	
茶舟のり（寸）		9				1							1		1	
髪結・長（寸）		10						1			1		1			
女郎屋かか（寸）		8	1			1			2	1	1		6		1	
谷粋（甲駅）		24				3		10	5	11		5	3	8	3	
金七（甲駅）		3				1		2		2	1	3		4	3	
後家（甲駅）		2					1	1			1		4		3	
女郎・三沢（甲駅）		1				1		3	1	1	2	1	3	3	2	

ある。これまで見てきた話者達だけからいうなら、まさに『洒落本』に反映された言語はその時期にあたるといえるようにも思われるが、例えば「侠者方言」をみればそうではないことが明らかである。

「侠者方言」に登場する侠者達（「十」「久米」「親分」「吉」）は、打消の助動詞「ない」から和語名詞に至る、つまり動詞以外のすべての環境でe:形式の使用がみられる話者達である。動詞については、そもそもai形式を含めた彼らの使用例自体が少ないのでなんともいえないが、おそらく『浮世風呂』に登場する「いさみ肌」の人間達と、e:形式の使用状況に関しては大差ないのではないかと考えられそうである。この資料に登場する話者はすべて侠者達と同様に広い範囲でe:形式の使用がみられるというわけではもちろんない。重要なことは、この場合は「侠者」という社会的属性を共有する話者だけが、e:形式を幅広い範囲で、高い頻度で使用するということである。「甲駅新話」の「谷粋」や「金七」も幅広い環境に長母音化がみれらるが、動詞まではe:形式が及んでいない。

「侠者方言」や「甲駅新話」の用例を考慮すれば、『洒落本』の時代にも、先に述べた「参る」が「めーる」になる以外にも、例えば「入る」を「へーる」といったり、「手合」を「てえー」といったりすることがあったことがわかる。少なくとも和語名詞中の連接母音aiが長母音化してe:になるような可能性が存在していたわけである。『浮世風呂』との違いは、動詞において長母音化がよく現れるかどうかという点であるが、調査範囲を広げれば『洒落本』に反映されている言語にも動詞における長母音化がもっとみつかる可能性もある。つまり社会全体としてどの範囲までe:形式が進出していたかという点では大差ないといえるのかもしれない。しかし、話者の個人別の使用状況を調査した今回の結果からは、両者には重要な違いがあったということができる。その違いを対比的にまとめると次のようになる[*10]。

Ⅰ.『洒落本』では、侠者達を中心としたごく一部の話者だけが飛び抜けて広い範囲で、高い頻度でe:形式を使用している。他の話者達はほとんどが限られた言語的環境でしかe:形式を使用しない。

Ⅱ.『浮世風呂』では、e:形式を使用しない話者がおり、一方可能な限りの（同一形態素中に出現する）aiをe:と発音しようとするようにみえる話者もおり、さらに両者の中間的な多くの話者が連続的に存在する。(3節<図②>参照)

小稿の目ざすところは、Ⅰのような状態をⅡのような状態の前の時期の状態として、適切に説明できるかどうかを見極めることである。Ⅱの『浮世風呂』に反映されている言語の状態を、Ⅰの『洒落本』の状態からの変化の一過程として位置づけるということは、3節で提示した言語変化の一断面のモデルである<図1>の前の段階として、別の一断面である<図3>のような状態を設定して、<図3>→<図1>という変化を考え

たのとは少し違うしくみを想定しなければならない。<図３>→<図１>という変化は、すべての話者集団に同じ速度で変化が浸透していくことを前提としたモデルである。話者集団間の違いは、最初に変化を受け入れた時期が早いか遅いかによってのみ左右され、遅く変化を受け入れた集団は、より早く受け入れた集団の後を同じ速度、同じ方向で追いかけるというものである。これは例えば、長距離走で10秒おきに一人ずつランナーがスタートし、ランナー同士の速度が等しいために、スタートの時と同じ順番、同じ間隔で次々とゴールをめざすようなものである。しかし『洒落本』におけるai形式とe：形式の使用状況を調べた限りでは、ai→e：という変化は、まず典型的には「侠者方言」に登場する侠者というような話者集団に受け入れられ、他の集団の追随をまたずに、その集団内でだけかなりの程度まで一般化が進み、そこまできた段階でやっと他の話者集団でも受け入れがはじまったものと考えるのが妥当であると思われる。今回調査した『洒落本』を全体としてとらえると、この「やっと他の話者集団でも受け入れがはじまった」段階に該当するものとして位置づけられるのではないだろうか。その後は、侠者集団を除けば<図３>→<図１>のようなパターンで変化が進行していき、３節の<図２>のような状態が形成されていったものと思われる。『浮世風呂』は、侠者集団以外の一部の話者も、侠者集団に追いついて、幅広い言語環境にe：形式の使用がみられるようになった状態を反映していると解釈することができるであろう。この例のように、ある新しい言語形式が、ある言語社会の特定の話者集団だけに受け入れられ、その内部でかなり幅広い一般化が完了した後に、はじめて他の集団にもこの新しい言語形式が飛び火するというのは、現在進行中の言語変化の研究などからも多くの例を挙げることができるものである。

5. おわりに

４節でも述べたように、『洒落本』は『浮世風呂』と違って、文献によってai形式とe：形式をどの程度厳密に、あるいは現実に忠実に反映させるかという態度が同一とはいえない部分がある。また、登場人物の数や、話者が属する社会階層も、『洒落本』は『浮世風呂』ほど多彩ではないし、『洒落本』の方には場面の特殊性という、言語使用に影響しそうな要素も存在している。しかし、前節の検討を通して明らかになったように、それらを差し引いてみたとしても、やはり『洒落本』と『浮世風呂』との間にみられるai形式とe：形式の使用状況の差には、言語変化の異なる段階を反映したことが原因としか考えられないような違いが存在するといえるであろう。ということは、連接母音aiの長母音化は『洒落本』に反映された言語や『浮世風呂』に反映された言語では、まさに進行中の変化であったと解釈すべきであるということであり、その点をデータをもとに確認

するという小稿の目的は達成されたといえよう。ai → e：以外の同類の変化（ae → e：、oi → e：、ui → e：）については稿を改めて述べるつもりである。

また、この変化は『浮世風呂』以降、どのような道筋をたどったのかということも非常に興味深い問題である。3節で提示した変化のモデルでいえば、『浮世風呂』の状態を＜図1＞とすると、その後は＜図4＞のような状態や、さらに進んでついにはe：形式がai形式を駆逐した状態に至るようにも思えるが、実際の歴史はそうではなかった。現代語をみれば、ai形式とe：形式の勢力図は、＜図1＞よりe：形式が後退したものとなっているからである。小稿の筆者の考えでは、この点を説明するためには、言語的環境とか発話者の社会的属性という要素を含めた考察だけでは到底及ばないのであって、さらに別の観点が必要だと思うのだが、その点に関しても別の機会に述べることにする。

＜註＞

*1 テキストは8本ともすべて「洒落本大成」（中央公論社）を使用した。

*2 例えば、「まいる」や「かわいい」のように、ai（あるいはe：）が動詞や形容詞などの語幹に現れるものは「和語名詞」に含めてある。

*3 『浮世風呂』では、Dの中でも特に打消の助動詞「ない」が、最も広い範囲の話者に、最も高い頻度で長母音化がみられる。このことから福島（1999 a）では、ai→e：は、助動詞の「ない」が最も早くその影響を受けたものであろうと推定している。

*4 福島（1999 a）では、＜表②＞の言語的環境の順がそのまま長母音化を受け入れた順を表していると考えているわけではなく、これら8種の言語的環境を4種の「序列」にまとめて、その序列がその言語社会での長母音化の頻度の高さや、変化の受け入れやすさを表していると規定している。

*5 仮名表記において「～へ（ゑ）」と「～い（ひ・ゐ）」という対立がみられる文献がある。例えば打消の助動詞を「ねへ」と表記してある場合と「ねい」と表記してある場合があったとしても、その表記から前者を長母音e：、後者を連接母音eiとして、明確な発音上の違いがあったとすることに関しては、小稿の筆者は同意できない。この点に関しては福島（1994）で述べている。

*6 小松（1985）でも「侠者方言」に現れるこの種の表記に関して言及があり（p 102）、やはり実際の発音を推定することに関しては保留されている。

*7 発音者は「志厚」、「如雷（2例）」、「小花屋娘お中」である。

*8 ただし、「寸南破良意」には「なへ」等Ca＋e型の表記が多くみられ、仮にこれをe：形式と同一のものと分類した場合には、かなり異なった性格のものと位置づけられよう。

*9 小田切（1943）、小松（1985）など参照。

*10 小松（1985）でも、明和期と化政期の長母音化（小松（1985）では「音訛」）の違いについて、小稿のⅠ、Ⅱとほぼ同趣旨ととらえ得る言及がすでにみられる（p 105）

＜参考文献＞

エイチソン，J.（1994）『言語変化－進化か，それとも衰退か－』若月剛訳　リーベル出版

小田切良知（1943）「明和期江戸語について－その上方的傾向の衰退－③」『国語と国文学』20．11

五所美子（1968）「式亭三馬の言語描写についての一考察」『語文研究』26

小松寿雄（1985）『江戸時代の国語』国語学叢書７　東京堂出版
福島直恭（1994b）「語幹末にエ列音を持つ形容詞－『あまねい』型の消滅と『あぶねえ』型の誕生－」『森野宗明教授退官記念論集　言語・文学・国語教育』三省堂
福島直恭（1999a）「連接母音 ai の長母音化に関する社会言語学的一考察」『国語学』196
福島直恭（1994b）「江戸語における ae，oi，ui の長母音化」『学習院女子大学紀要』創刊号
松村明（1957）「江戸語における連母音の音訛」『江戸語東京語の研究』　東京堂出版

（ふくしま　なおやす　本学助教授）